



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済  
[1981] 精道教育促進協会(宮屋三三・三四五二芦屋市船戸町12-6)

# 教皇様の叢

## 召し出しの数は 私たちの努力による

(一九八一年・二)

強調されました。

「幸いなるかな、……」。これは、キリストの使信の中心となる事柄を要約するためにイエズスがお使いになったことばです。この言葉はキリストの王国の基本法と言えます。価値観の大変更を提案するまさに革命的なことばです。イエズスの時代もそして今も相変わらず人々の考えのようになっていく価値観を変えよ、と要求しているからなのです。実のところ人々はつねに、色々な形の権力やお金、感覚的な快楽、手段を問わず他人に勝る努力、成功、世間的な名声を大切にしてきました。いずれも、この世という限られた世界で価値ありと考えられていることがらです。

昔から大勢の信者が、主に耳を傾けるために、霊的な山に登ってきました。(…)今日の集いを始めるに当って私は、至福八端のことばを繰り返したいと思えます。みなさんが、個人としてまた小教区民として、このことばの実行に力を尽くしてください。ことを望むからです。至福八端の中味を空で憶えてください。それを、みなさんの生活の指針(尺度)にして欲しいのです。以上が私の第一の望みです。

### 神は私たち一人ひとりをお呼びになる

聖パウロは、「あなたたちの召しだしについて考えよ」と繰り返しています。一人ひとりに向けられたことばとして聞かなければなりません。このことばは私たちの存在の根本的な面、つまり、私たちの生命は神の愛すべき計画の一部であるという事実について考えよと迫ってきます。

聖パウロはこの点について非常にはっきりとした考えをもっているのです、何度も繰り返してきます。神は、私たち一人ひとりを「お

選びになった」。私たちの「知恵、正しき、聖化、救い」となられた「キリスト・イエズス」において生きなければならぬ、と。

実に素晴らしい信仰の使信です。私たちの命の源に神の愛と永遠で無償の神の選びとがあるからです。それによって神は私たち一人ひとりに存在を与え、神と対話できるものとしてくださったのです。第二バチカン公会議では次のように宣言しています。「人間の尊厳はとくに神との交わりコミュニオに招かれたという事実にある。人間は生命を受けるとすぐに、神との話し合いにまねかれていたのである。」

すでにご存知のように、この対話は人間の罪によって中断されてしまいました。慈しみ深い神は対話を再開するために御父の永遠の愛のみことば、神の本性をもつことばをもって私たちに話しかけられ、そのみことばが人となり私たちのために死去なさることによって、ふたたび私たちが御父との交わりに入ることでできるようにしてくださいました。

だから聖パウロは、私たちが「キリストにおいて」召されると言います。キリスト教的召しだしの本質はまさに「キリストにおいて生きる」ことを意味するのです。これは神ご自身の御働き、神の愛と恵みのたまもの他なりません。そこで聖パウロはいみじくも、私たちがひとしく「主において誇る」と言うのです。

ところで、神の呼びかけに対しては答えなければなりません。どのように答えるべきなのでしょう。それは洗礼のなかに含まれていることばらをもって答えなければなりません。洗礼によって受けたものは、神のみ言葉によって支えられ、秘跡に育まれ、至福八端を目指して、「キリストにおいて」生きることによって示される、個人的な信仰の行為を通してより意識的、より責任を自覚したものとなります。そして、神の掟、なかでも最高の掟である愛のおきての実行におしみな心で

努力を傾けるのです。

### 道は多い

今のべた共通の召しだし、それは神が全員にひとしくお与えになるものですが、そのなかで、神が具体的な使命のためにおよびになる特別の召しだしがあります。もちろん、目的は同じであっても色々な種類の召し出しがあります。つまり、目的を達するための手段や方法が異なる色々な召し出しがあるのです。例えば、職業面からみて、ある仕事をし、それによって生計をたてるだけでなく、よりよい社会を建設するのに役立つことのできるよう、その仕事に適した専門の研究をする場合があります。私は特に、新しい生命を産みだすか、あるいは、取り残された子を養子にする場合を考えています。他にもたくさんあります。例えば、やもめになった夫、あるいは妻、孤児などの場合も考えられます。病人の場合も考えています。年をとる体も弱った孤獨な人々、また貧しい人々など。聖パウロは、「神は世の弱いものを選び、強いものを辱しめられた」と言っています。神の神秘なご計画に従い、恩恵の働きは人間の弱さを助けます。とくに、苦しい状態や見捨てられた人びとに恩恵の力が働くのです。

司祭や修道生活への召しだしを別に扱いたいと思います。教会は、すべてのキリストとその王国のためにささげ、福音に仕えるために全精力を傾ける寛大な人々を必要としています。(…)人口の増加にも拘わらず召しだしは増えないので、大きな問題になっています。国々をキリスト教の息吹で生き生きとさせるためには、神にすべてをささげた人々がどうしても必要なのです。(教皇として)私は、信者の方々の祈りと生活の証で支えてくださるようお願いいたします。召しだしが多くてかいたなは、私たち一人ひとりの努力にかかっています。このことを決して忘れないでください。

# 高齢者は教会の世(後)

エリザベットを模範として

みなさん、一緒に、お互いのために今、聖霊にお願ひしましょう。この聖霊のうちに目覚め、そして、毎日受ける愛のこもったすべての思いとことば、行ないに対する感謝の心を持ちましょう。私たちは、こんなに素晴らしいことにもすぐに慣れてしまい、あたり前のことのように思ってしまう。(…)

聖エリザベットは非常にすぐれた模範であり、困っている人々の保護者でもあります。仕事によって仕える人、ボランティア的な奉仕をする人、友人や親戚の間で仕える人などおよそ仕える人々の保護者であるのがエリザベットです。自分では気づかなくても、困っている人々のうちにキリストを見出す人々の保護者なのです。高齢者のみなさん、これこそ、皆さんが邪魔になりたくないと思っている人々に与えることのできるほうびなのです。彼らにとってみなさんはキリストに出会う機会であり成長するチャンスなのです。さきほどお話ししたように、みなさんが彼らに頼ることによって、神がみなさんのうちに成長させ実らせた収穫を彼らにわけ与えることができるのです。ですから臆病になったり、あきらめてしまったり、非難がましい心になったりして、自分の頼みを胸のうちにしまい込むことなく、ごく自然に言うて欲しいと思えます。ご自分の尊厳をかたく信じると共に、人びとの心よきに信頼してください。そして、このほかすばらしい「ありがとう」の一言を機会ある毎によるこんで口にしましょう。

もつと気の毒な人がいる

ことわざで、「寂しいときには出かけて行って自分よりもっと孤独な人を訪ねなさい」と言われています。みなさんにもこの知恵もってくださるようお願いいたします。道々で出会う気の毒な人たち、助けを必要とする人たちに心を開いてあげてください。少し話をしたり、ちょっと手を貸してあげたり、わずかの思いやりを示したりするだけで助けてあげることができのです。そうすることによって、みなさんが力と慰めを得ることができ(使徒行録20・35参照)、私はイエズスのみ

■自分の尊厳をかたく信じてと共に、人々の心のよさを信頼してください。そして、「ありがとう」の一言を機会ある毎によるこんで口にしましょう。

■人生の途上で出会う気の毒な人たちや助けを必要とする人々に心を開いてあげてください。

名によって約束します。

このようにして、小さな事柄のうちに、私たちが全体としてどうあるべきかを実行することになります。私たちは多数であっても一つの体を作りあげています。助けを与えるものもあれば、助けを受ける者もいる、健康な人もいれば、病気の人もいる、若い者もいれば老人もいるのです。人生の試練に耐えぬいた人もいれば、いま試みのさなかにいる人や、これから苦しみに耐えていかねばならない人もいます。今若い人もいるし、昔若かった人もいる、すでに年をとった人もいるし、これから年をとる人もいます。私たちはみんな、満ちみてるキリストの背丈をあらわします。私たちみな、それぞれ自分に定められた高さまで成長し、みちみてるキリストの背丈にまで至る完全な人間」になっていくのです。(エフエソ4・13)

死を意識するとき

巡礼者のみなさん、私たちがこの「涙の谷」で求める最後の慰めは、死に直面したときにやってきます。私たちはこの世に生を享けたときから、死に向って歩んできました。そして年を取ればとるほど、ますます死を意識します。(思いや感情のなかにあるこの意識を無理矢理に押えつけないでください)。創造主は、私たちが高齢を迎えたときに死の試みをすなおに受け入れ、それに耐えることのできるよう少しずつ準備させてくださいました。すでに見たように、年を取るといふことは、途切れることのない満ちみちた生命と、何もにも邪魔されずに保ってきたこの世とのつながりと共に、徐々に別れを言うことであるからです。

生と死のこの偉大な学舎において、数多くの葬儀に参列します。私たちのときが訪れ、人々がまわりで祈る日まで、何人もの臨終に立ち会うことでしょう。若い人たちよりも、

年輩の人々の方がこういうことを多く経験します。これからもしばば他人の死に出会うことでしょう。人々が思いがいをして、奈落の底であるとか闇夜であるとか考えがちなあのすばらしい始まりへ向う歩み、これに役立つのが今のべたような経験なのです。

入口は、私たちの側からみると、暗くみえます。しかし、神は愛の心から私たちのためにすべてをとのえてくださいますから、すでにその入口に到着した人々が私たちの一生につき従い、想像できないほど色々な機会に注意深くかたわらで見守ってくれているのです。この世の兄弟たちが助けの手を差し伸べることがそうそう出来なくなってくれば、そのときこそ、すでに死の試みを越え今は向う側で待っていてくれる人々が実は神の愛の使者であることに気づかなければなりません。聖人となった人々、私たち一人ひとりの守護の聖人、神のあわれみをうけてすでに天の故郷にたどりついたはずの親戚や兄弟たちは神の愛の使者なのです。

親愛なる兄弟のみなさん、たくさんの方々がすでに地上における生涯の伴侶を亡くされたことと思います。そういうみなさんに、司牧者としての忠告をさせていただきます。もっと神を自分の伴侶となさいますように。そうすれば、神のくださった生前の配偶者、今はもう神様のうちにいこう方々に、もっと一致することができるといふでしょう。

神と親しく交わっていないければ、最後の最後になって死に直面する時、なぐさめを得ることはできません。神様が、「死」において望まれるのは、わたしたちが神と親しく交わることだからです。少なくともわたしたちは、生涯のこの荘厳なときに、神の愛以外の何ものにも頼らずに、全身全霊をあげて神を愛することに熱心しなければなりません。これ以上澄んだ心でわたしたちの信仰、希望、愛を神に表わすことができるでしょうか。

# 説教・講話・書簡等の抄記

## 霊も私たちの弱さを助ける

これに関連してもう一つの慰めについて考えてみたいのですが、きつとみなさん方も賛成なさることだと思えます。死そのものが慰めである、ということですね。この世の生活は、たとえ「涙の谷」でなくても、永遠の住居でないことはたしかです。時が経つにつれて、牢に居るかのよう、あるいは追放の身であるかのよう、あるいは感じるものです。「過ぎ行くものはすべて、たとえ話のようなものだ」(ゲーテ『ファウスト』)とも言われ、また、「いつになっても新鮮なひびきをもつアウグス

チヌスのことばもあります。「主よ、あなたは私たちをご自身にむけてお造りになりました。ですから私たちの心はあなたのうちに憩うまで、安らぎを得ることができないのです」(告白録、第一巻第一章)(一)

私たちを待っているのは誕生なのです。生まれかわりなのです。それには苦しみが伴うでしょうが、それは一人ではなく、オリイブ山のイエズスと共に忍びます。ところで、その苦しみを越えてまはゆいばかりの光に入ること、洗礼によってイエズスのご死去と

勝利に与った私たちには、すでに保証されていると言えます。(ローマ6・3〜6他参照)

そろそろ終りの時が近づいてきました。終りにあたり、これまでの私たちの黙想を祈りにしたいと思えます。

「母のふところから、私はあなたにもたれてきました。年をとっても私を見捨てず、力おとろえたとき、私を見放したもうな」(詩篇71・6、9)

「あなたのおわれみによって私をお助けください。試みや罪からお守りください。救い

主イエズス・キリストを厚い信頼の心で待ち望むことのできますように」。

(二)つねにイエズスの霊において話され、イエズスを通してのみ御父に伝えることのできる私たちの祈りを、人間のなかで最初に救われた私たちの母であり「姉妹である聖母」(パウロ六世)の祈りに合わせてしたいと思います。

「天主の御母聖マリア、罪人なる我らのために、今も臨終の時も祈り給え/アーメン」

イエズス・キリストに賛美。

(一九八〇・十一月・十九日 ドイツ)

(体の不自由な人々に堅信をさすけられた時の話)

きょう、みなさんに堅信の秘跡を授けることができて、ほんとうに喜んでいました。私が嬉しいのは、すでにご存知のとおり、この秘跡を通じて、みなさんが素晴らしい賜物、つまり、聖三位一体の第三のペルソナである聖霊を受けられるからです。聖霊は、みなさんの上にくだり、まるでもっとも美しく大切な神殿に住まわれるかのように、みなさんのうちに住まわれます。

洗礼を受けたみなさんは、もうすでにキリスト信者となられました。神の子であり、イエズスの兄弟、そしてイエズスの弟子たちの共同体、つまり教会の一員であるわけです。しかし、この洗礼によって得た賜物は、今やもっと豊かに完成させられなければなりません。そして、このような働きをする新しい恩寵が、実は堅信の秘跡によって与えられるのです。(堅信の秘跡によって)聖霊は、洗礼の日にみなさんのうちにお始めになったこと

を、きょう完成してくださるのです。みなさんは、もっと親密にイエズスに一致し、教会の成人した、責任ある一員となります。以前は、子供のよう「受ける」だけだったのが今は、もう青年に、大人になったわけですから、これからは「与える」ことを学ばなければなりません。もっと成長して、主のために、それから兄弟や姉妹のために、美しく偉大なことを実行しなければなりません。

でも、みなさんはこうおっしゃるかもしれません。「わたしたちに何ができるでしょう。こんなに弱いのに」。

聖パウロが言ったことに、耳をかたむけてください。「霊も私たちの弱さを助ける……霊は筆舌につくしがたい嘆きをもって、わたしたちのためにとりついでくださる」。(ローマ8・26)聖霊は力と活動力をくださいます。聖霊の七つのたまもの中に「剛毅」という賜物があります。聖霊降臨の日に何が起ったか覚えていませんか。聖霊は、烈しい風のように来て、使徒たちがいっしょに集まってい

た高間を力のみたしたので。使徒たちは、並はずれた「剛毅」を授かり、恐れることなく教えを説き、イエズスが世界の救い主であることを証言し始めました。聖霊の力を体験した聖パウロも、私はとくに喜んで自分の弱さを誇りにしよう。そうすれば、キリストの力は私に住まれるであろう」と言っていました。ですから私たちも聖霊に祈りましょう。

信仰の力をお与えください、わたしたちを救ってくださる主をいつも信じられますように。希望の力をお与えください、いつも主が助けてくださることを信じ、また主のご慈愛に信頼をおくことができますように。愛の力をお与えください、心をこめて、主をますます愛せまますように、また、主のうちに、主のために、兄弟や姉妹を愛せまますように。堅忍の力をお与えください、自分のおかれた立場を勇氣をもって受け入れ、人々の救いのために苦しみをことごとく捨けることができますように。また、善の証人となり、人々に希望を与えることができますように。

剛毅の賜物だけでなく、聖霊は知恵の賜物もくださいます。知恵のたまものとは霊魂を照らす光であって、主の美しさ、主の真実と愛をいっしょに見ることができるよう、そして楽しみ味わうことができるようにしてくるのです。イエズスのおっしゃったことを聞か

れたことでしょうか。「天地の主なる父よ、あなたに感謝いたします。あなたは、これらのことを、小さな人々におあらわしてくださいました」。(マテオ11・25参照)

みなさんは「小さい」人々であると言えま。でも聖霊はたくさん大切なことを教えてください。神様とはどなたなのかわかるようにしてください。福音書を理解し、愛することができるようになってください。偽りの影や過ちと罪の暗闇から守ってください。偽りの影や過ちと罪の暗闇から守ってください。霊的世界のすべての美しいことや善いことが見える清い目をお与えください。どこにでも父なる神の現存と摂理を見ることができるようになる。輝くような目と、人々にも真実と兄弟愛への道を教えてあげることができるようになり喜びに輝く目をお与えください。

聖霊降臨の日に使徒たちの上に聖霊がくだったとき、その同じ高間に、イエズスの御母で私たちの霊的母であるマリア様もおられました。マリア様はみなさん一人ひとりのそばに、母として、霊的に現存されているのです。私たちが心をひらき、開けた知恵で聖霊の素晴らしい賜物を受け入れ、それを守ってゆけることができるように、マリア様、どうぞお助けください。

(一九八一・四月・十一日)

# 不変の教え

## 先生方へ

教師は、信仰と文化の関係のような特に今日的な問題に対して、非常な注意を要する特別な立場にいます。

現代人は文化の進歩に責任を負わねばならないと気づいています。解決すべき矛盾が山積みされていることをよく自覚しているのです。キリスト信者はより人間的な世界を建設するために人々と協力しなければなりません。人格があらゆる面で完成されるように文化を發展させねばならず、またとくに信者にあてはまりますが、人々がそのために召されているこのような仕事をおし進めることのできるよう助けなければなりません。教えと模範によって、生徒によい準備をさせ、信仰が完全な形で花をひらき実をならせるように努めるのはとくにカトリック教師の仕事です。教師は自らよく準備をした上で、生徒に次のような点を教えなければなりません。

例えば宗教教育と文化・人間的教育とは切り離すことはできないこと。  
キリスト教の救いの福音と文化の間にはほどほど実り多い関係があるか。  
何世紀もの長きを通じてあらゆる条件のもとに生きてきた教会は、どれほど努力を傾けて、色々な国々の文化遺産を活用しキリストの使信を広め、説明してきたか。  
また典礼生活といくつもの信者の共同体のそれぞれ異なる歴史のなかで、その使信をいかに研究し、表現してきたか。  
キリストの福音は、どれほど墮落した人間の生活と文化を新たにし、誤りを正し、克服し、また国々の道徳を浄め高めてきたか。  
以上すべて特にカトリック信者である教師が教えるべき事柄なのです。

若者たちを知的な生き方に導く

今日の若者たちを知性と理性へと導いてやってくください。この知性と理性こそ、あらゆる形の不可知論や理神論に対抗して、教会がつねに守り、また人間への大きな信頼をこめて養ってきたもので、超越的な諸価値をうけ入れることのできる開かれた能力なのです。科学と創造性、分析と想像、技術と観想、倫理教育と専門教育、社会・政治参加と宗教的に関けた態度、このような点をそなえた人々を教育し、世に送り出すのがみなさん方の学校における役目なのです。ゆえに学校は経営者、技術者、明日の社会の必要をみだす生産に与る労働者などを作る手段にとどまるわけにはゆきません。生き生きとした中枢として、若い人々に全体的な人間性尊重を教えるべきところなのです。

これは、まことに高尚な教育目的であると言えます。みなさん方は生徒と一緒に生きてきた学校を新たにすること、学校の主人公的な仕事をするに、子供たちの総合的教育に深い関心をもつ教会はこのような仕事をみなさん方にお任せしています。大変厳しい仕事です。まずみなさんが広範囲にわたる深い教養と共に、しっかりと根をおろした信仰を身につけていなければなりません。

(一九八一・三・十六)

## メガネ商や検眼師の方へ

みなさんがローマに集まって会合を開かれたことを知り、とても喜んでいました。正確な仕事という点で秀でた方々を表彰するためだけになく、なによりもまず、新しい知識や技術を吸収し、また、完成させるために集まった、視覚器官の欠陥を直し、できればそうした欠陥を防ぐための、光化学器械やサービ

## 愛するみなさん

スを人々に提供するための会合と知ったからなのです。人間にとって、視力のはかり知れないほど貴重なものですが、これに気づいていること自体、みなさんの熟練した仕事を必要とする人々に仕えるために、よい刺激となつていないでしょうか。また同時に、単なる商売の域をこえ、人に深い尊敬をもって接していく人間関係においても、よい刺激でしょう。主は、このすぐれた賜物、この素晴らしい器官を授けてくださいました。科学の発明しえた、どんなに完全でかつ複雑な光化学器械も、視力という器官の前には色あせてしまうのです。こういうことを考えると、いかに精巧な仕事が必要されているかに気づくと同時に、この種の仕事がいかに重大な人間的、あるいは社会的影響力をもっているかがおわかりになると思います。

「目」と「視力」というのは実際とても貴重なもので、日常用語においても、これらのことばは最も高いことを説明するとき、たとえとして使われているぐらいです。聖書においても、よりすぐれた考えを述べるときに使われているのです。「体のあかりは目である。目がよければ、全身があかるい。しかし、目が悪ければ、全身が闇の中にある。」(マテオ6・22、ルカ11・34) 預言的光が目につけられているとする聖書のことばもあります。「あなたたちが見たことを見る目は、しあわせである。私はいう。数多くの預言者や王が、あなたたちの見ていることを見たいと望んだが見られず、あなたたちの聞いていることを聞くとうと望んで聞けなかった。」(ルカ10・23、24)

視力という、これほどすぐれた値打ちのあるものをまねにして、みなさんは、もちろん、仕事自身に対する真剣さと道徳的に高潔な精神

神とを、注意深く両立させていかれることと  
思います。そうであれば、みなさんを信頼している人々をあわてさせるようなことは、すべて避けることができるのです。裏切らないでください。このとてもデリケートな奉仕であるみなさんの仕事に、寛大な心で専心してくださいますように。仕事をするときにはいつも、ナザレトの職人イエズスから、ひらめきを得ることができまうように。(…)

愛する兄弟のみなさん、こうした考えや勧めを述べるに際して、ひとこと、結論のつもりで言わせてください。常に、キリスト信者の敏感な心をもって活動してください。途中で出会う困難にくじけないでください。何にもまして、みなさんの奉仕に高貴な精神を刻みつけられますように。そうすれば、物よりも、まず人々を優先するようになられるでしょう。

みなさんの保護の聖人、聖ルチアの御取り次ぎによって、主が豊かな恩寵を注いでくださることを願いながら、喜んで、みなさんとみなさんの愛しておられる方々、それに仕事仲間の方々に、私の愛情の印である使徒的祝福をさしあげます。(一九八一・四・二十七)

## お知らせ

■当協会は、信徒の霊性の  
開拓者と称されるエスクリ  
パー神父のニュース・レター  
配布を受託しております。

●ご希望の方々は、左記の住所までご連絡ください。

精道教育促進協会  
〒659 芦屋市船戸町十二の六  
ニュース・レター係

『教皇様の声』 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしに  
そのまま伝える月刊紙 ■毎月 十日発行 ■定価 一部六十円送料六十円  
■一年予約七百二十四円送料七百二十四円 ■二十部以上一括購入なら送料不要

郵便振替  
神戸  
072393